

令和 7 年度 春期

午前 I 共通問題(SC, NW, ST, SA, SM)試験分析と講評

■午前 I 試験(高度試験共通)講評

共通知識として幅広い出題範囲の全分野から 30 問が出題される試験です。今回の分野別出題数はテクノロジ分野が 17 問、マネジメント分野が 5 問、ストラテジ分野が 8 問でこれまでと同じでした。出題された問題は、従来どおり全て同時期に実施された応用情報技術者試験（以下、AP 試験）の午前問題 80 問から選択されています。重点分野のセキュリティからの出題が 4 問と最も多く、今回、ユーザーインタフェースと技術戦略マネジメント分野からの出題はありませんでした。

新しい内容の新傾向といえる問題は次の 8 問（前回 3 問）で、かなり増えています。選択元の AP 試験で増えていることによるものといえます。

- 問 2 機械学習の過程で過学習と疑われたときの解消方法
- 問 5 稼働率、MTBF、MTTR で成り立つ関係式
- 問 7 間欠動作の平均電流を $1\mu\text{A}$ 以下にするための待機時間
- 問 10 同じ値のコードをもつ表の行を自動的に削除する SQL 文
- 問 12 CRYPTREC 暗号リストの説明（ST 既出問題、AP では初）
- 問 23 DX 認定制度における認定基準に含まれている事項
- 問 27 エッジ AI においてエッジデバイスで行われる推論処理
- 問 30 生成 AI を利用した画像生成と利用の著作権侵害について

これまで繰り返し出題されている定番といえる問題は 14 問程度で、前回の 16 問から少し減っています。なお、やや難しいと考えた問題は 6 問（問 5, 7, 12, 18, 24, 25）で、前回の 2 問から増えています。

問題の出題形式は、文章の正誤問題が 14 問（前回 18 問）、用語問題が 5 問（前回 5 問）、計算問題が 4 問（前回 4 問）、考察問題が 7 問（前回 3 問）で、考察問題が増え、文章問題が減っています。これらのことから、全体として少し難しいと感じた受験者が多かったと思われます。

（今回の分野別出題内容）☐は新傾向問題、☐は既出の定番問題

- ・テクノロジ分野……近似値、機械学習の過学習、スタック、CPU 処理時間、稼働率の関係、LRU 方式、待機時間、SVG 画像、正規形の変換、SQL (CASCADE)、PoE、CRYPTREC 暗号リスト、SBOM、OS コマンドインジェクション、プロトコルの関係、デザインレビュー、スプリントレビュー

- ・マネジメント分野……EVM によるプロジェクト評価、クラッシング、サービス停止時間、監査のウォークスルー法、監査手続
- ・ストラテジ分野……DX 認定制度、クラウドを実現するプロビジョニング、契約形態、PPM、エッジ AI の推論処理、AI を用いたマシンビジョン、変動費の計算、生成 AI 利用の著作権侵害

分野別の出題数は次のような結果で、従来と同じでした。

分野	大分類	分野別	R6年春	R6年秋	R7年春
テクノロジ系	基礎理論	17	3	3	3
	コンピュータシステム		4	5	4
	技術要素		8	8	8
	開発技術		2	1	2
マネジメント系	プロジェクトマネジメント	5	2	2	2
	サービスマネジメント		3	3	3
ストラテジ系	システム戦略	8	3	3	3
	経営戦略		3	3	3
	企業と法務		2	2	2
合計		30	30	30	30

これまで、出題される問題の約 7 割は、過去の基本情報技術者試験や AP 試験で出題された基本的な内容でしたが、今回は 5 割程度に減りました。高度試験で専門分野の力を発揮するのは午前 II の専門知識の試験からになりますが、午前 I 試験から受験する人は、過去の応用情報技術者試験の午前問題を解き、余裕をもって 7 割以上正解できるように、理解度を上げてください。

IPA の試験統計情報を分析すると、高度試験を午前 I から受けた人のうち、60 点以上取れた人は 5 割から 6 割台で推移していて、半数近くの人が次の午前 II 以降の採点に進んでいない状況です。高度共通の午前 I 試験では難しい内容も出題されますが、苦手な分野の学習は基本的な問題が多い基本情報技術者試験の内容から始め、基礎知識を確実に理解するようにしてください。

また、出題範囲が広いため、全体をまんべんなく学習するのにかなり時間がかかります。そのため、試験対策としては、これまで出題された出題内容のポイント事項を重点的に解説したアイテック刊行の「高度午前 I ・応用情報 午前試験対策書」で効率よく学習することをお勧めします。

以上

令和7年度春期

ITストラテジスト試験分析と講評

■全体講評

午前Ⅱは、経営戦略マネジメントで2問、システム戦略、システム企画、ビジネスインダストリ、セキュリティで各1問、目新しい問題が見受けられました。今回の新出問題数は例年と同じでした。全体的には依然として（他種別も含め）過去問からの出題が多く、標準的な難易度でした。午後Ⅰは、三者三様の企業・自治体を取り上げられましたが、事業内容が分かりやすい事例でした。難易度は前回の令和6年度と大きな差はありませんが、受験者に分かりやすい事業内容という点と解答として制限文字数にまとめる比較的高度な技術が必要だったことを踏まえると、標準的でした。午後Ⅱは、基幹システムの刷新方法で改修ではなく、刷新する必要性なども求められた問題やDXの企画策定といった、企画に関する論点の問題でした。両問とも、過去問の演習で準備していた方も多いかと思われます。ITストラテジストの視座と問題文の指示を外さなければ、比較的論述しやすい内容だったと思います。

午前Ⅱは、ECRS、ODM、コンテンツマーケティング、S&OP、生産工場におけるエネルギーレビューのプロセス、リーダーシップに求められる機能、共有リソースに同時にアクセスした場合に想定外の動作をする問題などが新傾向問題として出題されました。分析技術や新しい技術の知見が要求される一方で、名称から内容を想起できそうな問題や、選択肢から必然的に正答が導ける問題もあり、知識と本番での想像力（応用力）も必要となっていました。

午後Ⅰの出題内容は、問1がスタートアップ企業、問2が地方自治体、問3はドラッグストアチェーンが主体の問題でした。3問とも想定が可能な業態・事業であったため、内容は一定程度理解しやすかったのではないかと思います。多くの設問は問題文中の該当箇所が明確であるため比較的答えやすかったといえますが、一部の設問では解答に取り入れたい表現が多くあり、制限文字数に編集することが難しいと思われるものもありました。

午後Ⅱは、問1が基幹システムの刷新方針の策定、問2がDXの企画策定という出題でした。今回はオーソドックスな問題構成でシステム化計画、企画系で練習されていた受験者には比較的对応しやすかったと思われます。どちらの問題もITストラテジストの分析力や立案力を問う内容でした。問1、問2ともに問題文の設定がかなり細かく指定されており、設問においてもそ

の細かい設定を解答に要求している点などが特徴的でした。
近年の試験の応募者数や合格率は次表のとおりです。

年度	応募者数	受験者数	合格者数
令和5年度春期	7,040	4,972	769
令和6年度春期	7,486	5,327	842
令和7年度春期	7,889	5,586	836

■午前Ⅱの問題講評

分野別の出題を整理すると、次のようになります。

分野	出題数	分野	出題数
システム戦略	3	ビジネスインダストリ	3
システム企画	2	企業活動	4
経営戦略マネジメント	8	法務	1
技術戦略マネジメント	1	セキュリティ	3

今回も経営戦略マネジメント、システム戦略、ビジネスインダストリ、企業活動の四つの主要分野で7割が出題されています。今回はシステム戦略が1問増え、法務が1問減と細かい増減が見られました。昨年までは長らく企業活動と法務で合わせて6問という校正でしたが今年は5問になりました。

システム戦略では、ロジスティック回帰分析やECRS、決定木分析、経営戦略マネジメントでは、コンテンツマーケティング、バランススコアカード、S&OPなどの意味を問う問題が出題されました。経営戦略マネジメントでは、英語の意味や既存知識から選択肢の消去法などで正答にたどり付いた方もいたのではないのでしょうか。セキュリティのレースコンディションについても初めての出題です。正答以外の選択肢はセキュリティの基本的な知識で内容が分かるものであり、正答の推定が可能だったと思われます。新傾向の問題数は例年と変わらず、過去に出題された問題や過去問からの派生問題も例年どおりという印象を受けたため、難易度は標準的だと考えます。

午前Ⅱは、試験では見たことのない新しい問題も幾つか出題されますが、過去問で培った知識や用語の意味をしっかりと理解していれば、誤った選択肢を消去して正解にたどり着ける問題も少なくありません。さらに、過去問をベースにした問題では、以前の試験で不正解だった選択肢が、今回は正解として登場するケースも考えられます。このため、過去問を徹底的に学習し、正解の選択肢はもちろん、不正解だった選択肢の内容もきちんと把握しておく

ことが、効果的な対策となります。関連する用語の知識を増やしておけば、新しいタイプの問題や過去問から少し形を変えた問題でも、得点できるチャンスが広がります。また、キャッシュフロー、投資効果の問題では、計算して解答する問題もありますので、用語だけでなく、計算方法なども練習しておくといでしょう。

■午後Ⅰ試験講評

3問ともに受験者が内容を想像しやすい事業や企業（自治体を含む）が題材となっていたため、問題に取り組みやすかったように思えます。また、設問に対応する問題文の記述箇所の文章量が多く、どのように解答を編集するかに手間取る設問も散見され、解答作成時に時間を要する設問が多い印象を受けました。

問1は、動画の解析技術の活用が題材になっていました。大学の教授とその研修室メンバーという設定でしたが、問題文も順序立てて構成されていて解答しやすい問題でした。問2は、地方自治体の強み・弱みを確認し、その対応がどれに当たるかを判断する必要がありました。ニーズが複数の場所に表現され、粒度も異なるため、設問要求にあった解答表現にたどりつくのに苦労した方も多かったと思います。問3は、業態は分かりやすい事例でしたが、ニーズと自社の対応をどう組み合わせるか、整合性の確認が必要でした。3問の解答字数は230～265字と、かなり多かった前回からは大きく減少した印象を受けます。

問題で扱われる業種や業務は様々ですが、3問とも分かりやすい事例であり、事業内容を想像しやすく、自身の経験から解答を予想してしまうことがないように注意が必要でした。

次に、各問の出題内容を見ていきます。

問1 スタートアップ企業でのITを活用した新たなビジネス領域の開拓

情報系大学の教授とその研究室メンバーが起業した動画解析サービスを専門とするスタートアップ企業で、新たな事業展開を行うことがストーリーとなっていました。このスタートアップという設定がどういう意図なのかを気にしながら問題文を読むことになりました。

設問1は、Y社が提供するサービスが生かせる市場ニーズを答える問題でした。“ネットワークカメラ市場をY社の新たなビジネス領域にできると考えた”という条件が付いているのでこれを意識する必要があります。設問2は、成長戦略に関する設問で、業務提携の目的や特定機能をもたせた背景、業務

連携によるサービスが提供できると考えた理由が問われました。スタートアップ企業であり、競合が多く、模倣性が高いと考えると、自ずと業務提携となる流れになっていました。丁寧に問題文を読んで設問に対応させる必要がありました。設問3は、新サービスの開発についての設問でした。機能についてのニーズや効果などが問われました。設問3も問題文の中から解答に必要な箇所の特定は比較的円滑にできたかと思いますが、解答としてどうまとめるかで苦労する設問も多く、難易度は標準的でした。

問2 ITを活用した子育て支援の強化

令和6年度も問2は地方新聞社に関する問題でしたが、今回も地方の自治体がテーマになっていました。そしてこの自治体は少し変わった取組をして、日本全国の自治体が悩んでいることを解決しているという設定でした。子育てを経験したことがある受験者にとっては、設定などは理解しやすかったかとも思います。

設問1では、M市の環境変化が問われています。設問文に“Angel City Planを定めるに当たり”という前提条件が入っていることを踏まえて解答を作成する必要がありました。また、目的達成に向けた状況を把握するために定めるべき指標も問われました。これも問題文から指標として設定できそうなものが複数ありました。設問2は、アンケート調査に関するものでした。地元ではなく流入してきた世帯だからこそその問題点やM市の行政機関における問題点なども問われました。制度はある程度整っているがその周知が弱い点を把握して、解答を作成する必要がありました。設問3は、子育て支援の実際の対応が中心でした。ある程度解答の要素となる問題文の対応箇所は発見できたかと思いますが、一部でどこまで解答に含めて良いのかに悩む設問もありました。難易度は標準的でした。

問3 ドラッグストアにおけるITを活用した新規サービス立上げ

K地域を中心に展開しているドラッグストアチェーンという設定でした。地域に根付いた戦略をとっていて、地元の人たちに愛されている様子も見えて取れました。冒頭部分の企業の特徴には強みなどが示される場合があるので注意しましょう。

設問1では、出店する戦略の狙いや業務標準化の効果などが問われました。特に、(2)はどのように解答をまとめるかに苦労された方も多かったと思います。専門知識のないスタッフでも効率的に運営できることが、どういう効果を狙っているかについて、丁寧に問題文を読む必要がありました。設問2

は、CX を高めることとした背景に関する問題でした。“小売売場の観点で”と設問文中に条件が付されていますのでここをしっかりと意識して解答する必要があります。設問 3 は、健康生活アプリについての機能と施策の関係や顧客ニーズ、C 社の強みなどが問われていました。午後Ⅰでよくある問題文の構成でニーズから施策、対応内容と順に書かれているので、丁寧に関係性を読み取る必要がありました。設問 4 では、現在で問題になっていることをベースに解答します。問題文のいろいろな箇所に必要な情報が散りばめられている状況なので、ヒントの在処はなんとなく分かるが、これだけでよいのかという不安に駆られながらの解答作成になったのではないのでしょうか。問 3 の難易度も標準的でした。

■午後Ⅱ試験講評

今回は、問 1 が基幹システムの刷新方針の策定、問 2 が DX の企画策定と、IT ストラテジストの立案力を問う実務的なテーマでした。問 1 はどちらかというと情報システム戦略を意識した企画寄りの内容、問 2 は経営課題の解決を意識した DX の企画となっていました。以前はシステム化計画も出題されていましたが、近年では企画系の問題が多く出題される傾向にあり、今回の問 1 はシステム化計画のような雰囲気も醸し出していました。両問ともに似通ったテーマで準備ができていた受験者も多かったと思います。設問要求にしっかり対応して記述できたか、判断・行動に根拠を記せたかなど、基本的な採点のポイントを外さないように注意しながら書き進めれば、準備ができていた方はもちろんのこと、実務で経験したことがあれば比較的論述しやすかったのではないかと思います。

問 1 基幹システムの刷新方針の策定について

この問題文を読んで感じたことは、かなり条件が縛られているということです。内容面では 5 段落ありますが、全てが論述内容への指示と考えてもよいくらいの内容となっていました。問題文としてここまで細かく制限をかける問題も珍しいと感じました。

設問Ⅰでは、刷新することの必要性や経営上の有効性を明らかにしなくてはなりません。また、特に重要と考えて工夫したことは、問題文の 4 段落目を意識して記述する必要がありました。さらに、この設問の中心は“どのような刷新方針を策定したか”なので、刷新の方針も忘れずに述べるように注意したいところです。

設問Ⅱは、事業部門と行った交渉や調整、経営層にどのような説明をした

か、経営層の評価を受けて改善したことを記述します。事業部門と行った交渉や調整は 5 段落の内容をヒントに論述する必要があります。ただ、5 段落の内容は間接的に 4 段落目の内容を示唆しているので、設問Ⅱで解答した工夫点などとの連携も必要となります。また、問題文には「事業部門との交渉や調整を行い、事業部門からの協力や支持を得た上で、経営層に説明し～」とあるので、協力や支持を得たことを経営層への説明で示す必要があります。多くの例示がありますので、自身が準備してきた内容を問題文の趣旨に沿ってカスタマイズできたかがポイントになりました。難易度は標準的でした。

問 2 DX の企画策定について

DX の企画策定というテーマですが、経営課題の解決において、手段として DX を推進するという設定になっています。あくまでも経営課題の解決が主眼であることを意識したい問題でした。こちらの問題も問題文にかなり細かい指定がありますので、注意して論述する必要があります。設問Ⅱで記述すべき内容は、問題文の 1 段落目の 3 行目後半から書かれている設定を意識する必要があります。そのため、自身が準備してきた論文の前提をカスタマイズする必要があったのではないのでしょうか。しかしながら、問題文に示されている例は熟練者不足になっているので、どの会社でも起こり得る例示だったことで、対応できた受験者も多かったと思います。設問Ⅲでは、設問文自体には大した条件が書かれていませんが、対応する問題文（2 段落目周辺）には、かなり多くの条件が記されていました。特に、問題文の中央にある“次のようなことを明確にし”の 3 点はどこまで記述内容に反映すべきか悩まれた方が多かったと思います。設問Ⅳでは、変革を阻害する要因の想定やその対応策の反映、対応策に取り入れた経営層や事業部門の意思など、設問Ⅳにしては要求事項がとても多かったです。準備してきた受験者にとっても、設問Ⅳを制限字数に収めるために苦労されたのではないのでしょうか。比較的準備がしやすいテーマでありながら、解答内容の指定が厳しいことを踏まえると、難易度は標準的と判断します。

■次回の試験に向けて

IT ストラテジスト試験の午前Ⅱでは、最新の IT 用語が毎年のように出題されます。そのため、日ごろから新聞やインターネット、経営情報誌などを通じて、アンテナを高く張っておくことが重要です。新しい用語については、概要をしっかりと理解しておけば対応できるでしょう。

試験で目にする用語の名称を注意深く読み解き、それがどのような意味を

もつのかを連想することや過去に出題された問題を繰り返し解くことも大切です。不正解の選択肢についても深く理解することで、まだ見ぬ新しい傾向の問題に遭遇した際にも、消去法などを活用して正解に近づける練習になります。出題範囲としては、経営戦略マネジメント、システム戦略、ビジネスインダストリ、企業活動の四つの分野からの出題が全体の約 7 割を占めています。したがって、これらの分野を中心に知識を強化していくのが効率的な対策と言えるでしょう。そして、過去問からの出題も依然として多いため、過去問演習は絶対に欠かせません。

午後Ⅰに関しては、問題文の中に解答の手がかりが隠されていることが多く、丁寧に読めば正答にたどり着けます。今回のように、状況がイメージしやすいケースでは、自分の思い込みによる誤解は避け、想像しやすいからこそ、問題文を読み込み、状況を正確に把握することが肝要です。過去問に取り組む際には、単に問題文中の該当箇所を探し出すだけでなく、設問が具体的に何を聞いているのかを理解し、どのような答えが求められているのかを常に意識することが重要です。設問の要求と問題文に散りばめられたヒントを結びつける作業を、念入りに行う必要があります。問題文からそのまま抜き出すだけでなく、解答を作成する際に適切な言葉に修正したり、言い換えたりする能力が求められます。IT ストラテジスト試験の問題文では、冒頭に戦略などが書かれ、その後現状（問題点・課題）、ニーズや背景、対応策の順で記載されている場合が多いです。この関係性を丁寧に紐付けることが重要です。

さらに、解答においては、問題文に出てくる重要なキーワードを効果的に使い、具体的な事例を挙げることで、採点者に対して自分の解答が的を射ていることを明確に伝えましょう。得点を確実に獲得するためにも、この点を日ごろの練習から意識しておくことが大切です。午後Ⅰ試験対策の基本は、問題文には必ず何らかのヒントが含まれているという前提で、それを注意深く読み解くことです。技術的な内容はもちろんのこと、戦略的な視点や事例企業の現状、強みと弱み、機会と脅威といった要素を意識しながら過去問演習に取り組むべきです。ヒントは 1 箇所だけでなく、複数の場所に分散していたり、異なる段落にまたがっていたりすることもあるため、問題文全体をじっくりと読み込み、手がかりを見逃さないようにすることが重要です。

もし、午後Ⅰ試験でなかなか点数が伸びないと感じているならば、模範解答を採点者の立場になって詳細に分析することが有効です。多くの場合、「設問の意図を正確に捉えられていない」あるいは「解答が論理的な文章として構成されていない」といった理由で失点しています。自分の解答と模範解答

を比較し、具体的にどこが異なっているのかを深く考察することで、問題文の正しい読み方や設問が求める要件がより明確になるでしょう。

午後Ⅱの論述試験では、経営層と同じ目線で物事を捉え、判断する能力です。経営に関する専門用語や戦略を策定する手法を理解し、使いこなせることが必要です。過去問に取り組む際には、問題文に示された事例を活用し、設問の要求に合致した論述ができるように訓練しましょう。設問が複数の要素を含む要求をしている場合には、記述すべき項目を分類して整理し、記述漏れがないように注意することもテクニックです。自分の主観的な意見を述べるのではなく、試験の出題者が意図する記述内容にすることが求められます。問題文に具体的な指示がある場合は、自身の考えを軽率に記述するのではなく、その指示に忠実に従うように心がけましょう。特に、設問アで問われることが多い「事業特性」は、続く設問イや設問ウにおける議論の根拠となる重要な要素です。安易にとらえることなく、設問イや設問ウで展開する内容を念頭に置きながら、それらと密接に関連する事業特性を示す必要があります。

さらに、午後Ⅱ試験対策としては、最新の IT 技術をテーマにした問題が多く出題されるため、自身の知識や経験をベースにしつつ、設問の要求に応じてどのように解答を組み立て、調整するかを練習することが効果的です。多角的な視点からの議論が求められるため、概要の説明に始まり、具体的な事例を提示し、そしてその根拠を順序立てて論述する練習が重要です。設問ウは、昨今変化が起きています。従前は経営層やマネジメント層に対する説明と評価、事業部門に対する説明と評価、そして自己評価という三つの主要なパターンというまとめに近い内容でしたが、最近では、何をしたかの設問イに近い内容を要求してくる場合があります。字数制限もあるので、いかにコンパクトにまとめるかがポイントになります。

IT ストラテジストは経営層に近いポジションといいますが、経営者そのものではなく、現場の責任者とも異なります。単なる技術の専門家ではなく、経営戦略や IT 戦略を踏まえたアプローチができる専門家としての能力が重要です。経営戦略や事業戦略を日常から意識し、物事の捉え方を磨くことが必要です。また、事業環境を SWOT 分析で評価することも大切で、強みと機会を基に戦略を策定することが一般的です。このため、過去問を使った実践的な練習が役立ちます。設問アで事業目標や経営目標を具体的に明示する練習をしておきましょう。

以上